

# 小波瀾

ЖИТЕЙСКАЯ МЕЛОЧЬ

アントン・チェーホフ Anton Chekhov

青空文庫



ニコライ・イーリイツチ・ベリヤーエフというのはペテルブルグの家作持ちで、競馬氣違いで、そして栄養のいいてらてらした顔の、年の頃三十二ぐらいの若紳士であつた。その彼がある晩のこと、オリガ・イワーノヴナ・イルニナ夫人に逢<sup>あ</sup>いに行つた。この女は彼と同<sup>どう</sup>棲<sup>せい</sup>していた、或いは彼自身の表現を借りれば、彼は彼女と退屈な長つたらしいロマンスをひきずつていたのであつた。實際、このロマンスのはなはだ興味があり、崇高<sup>すうこう</sup>ですらあつた書き出しの幾ページかは、とつこの昔に読まれてしまつたので、今ではなんの珍しいことも面白いこともないページが、だらだらと続いているだけであつた。

あいにくオリガ・イワーノヴァは留守だつたので、私たちの主人公は客間の寝椅子ねいすに寝そべつて、彼女の帰宅を待ち受けることになつた。

「今晚は、ニコライ・イーリイイツチ！」と男の児この声がした、  
「ママはじきに帰つて来ますよ。今ソーニヤと一緒に仕立て屋さんへ行つたの。」

同じ客間の長椅子の上にオリガ・イワーノヴァの息子でアリヨーシヤという八つになる児が寝ころがつていた。彼はなかなか綺麗な男の児で、ビロードのジャケツを着て黒の長靴下はを穿いた姿は、まるで絵でも見るようだつた。彼は繻子しゆすのクツシヨンの上に寝て、最近にサークスを見物したとき眼をつけた軽業師まねの真似まねを

しているらしく、片脚をかわりばんこに上へ蹴り上げていた。やがて上品に出来あがつた脚がくたびれてしまうと、こんどは両手を使い出して、猛烈に飛び上がつてみたり、四つん這ばいになつて逆立ちの稽古をやり始めた。そんなことをやつている彼の顔つきはとても真剣で、苦しそうに息をはずませたりして、まるで神様がこんなにいつときもじつとしていられない身体をお授けになつたことを怨んでいるように見えた。

「やあ、今晚は、先生」とベリヤーエフは言つた、「君だつたのか。ちつとも気がつかなかつたなあ。お母さんは丈夫かい？」

アリヨーシャは右手で左足の踵かかとをつまみ、頗る不自然な姿勢になつたかと思うとくるりと引つくり返り、途端に飛びあがつて房

の一ぱいついた大きなランプの笠のかさの下からベリヤーエフの顔を覗のぞきこんだ。

「さあ何て言うのかなあ？」と少年はちょっと肩を揺すつて答えた、「本当を言うと僕のママはいつだつて丈夫じやないんですよ。ママは女でしよう、ところが女つてものは、ニコライ・イーリイツチ、しょっちゅうどこかしら痛いんですよ。」

ベリヤーエフは手持ち無沙汰ぶさただつたので、アリヨーシヤの顔を眺めはじめた。彼はオリガ・イワーノヴナと今のような関係になつてから、まだ一度もこの男の児に注意を向けたこともなく、全くその存在を無視していた。男の児は彼の眼の前にいつも姿を見せた。けれど彼は、なぜこの児がいるのか、どんな役目をしてい

るのか、そんなことは考えてみようとも思わなかつた。

夕暮れの薄ら明かりに浮かびあがつてゐるアリヨーシヤの、蒼あ白おじろい額ひたいと瞬いまばたきをしない黒い眼を持つた顔は、不意にベリヤーエフに、ロマンスの最初の頃のオリガ・イワーノヴナを思い出させた。そこで彼は、その児をかわいがつてやろうという気になつた。「さあ先生、ここへお出いで」と彼は言つた、「ひとつおじ小父さんにもつと近い所で顔を見せておくれ。」

少年は長椅子から一足飛びに跳とび下りて、ベリヤーエフの方へ駆かけ寄つた。

「そこでと」と、少年の瘠せた肩に手を掛けて、ニコライ・イーリイツチは始めた、「どうだね、元氣かい？」

「さあ何て言うのかなあ？ 前の方がもつとよかつたなあ。」

「ふむ、どうして？」

「わけは簡単なんですよ。前にはソーニヤと一緒に唱歌と読み方をやつてればよかつたんでしょう？ ところがこんどはフランス語の詩を あんしょう 暗誦するんですもの。小父さんこの頃お鬚を刈つたんでしょう？」

「ああ、この間さ。」

「そうだと思つたんだ。お鬚がちやあんと短くなつてますもの。ちよつと触らせてみせてよ。……こうやつて痛かない？」

「いいや、痛くなんかないさ。」

「なぜ一本きり引つ張ると痛くつて、たくさん 沢山いつぺんに引つ張る

とちつとも痛くないの？ ふうん。——でも小父さんは頬髯がな  
いからおかしいなあ。ここんとこんから剃つちまつて、それから  
横つちよのここんところは残しとくんですよ。……」

少年はベリヤーエフの頸つ玉に巻きついて来て、彼の時計の鎖  
をいじりはじめた。

「僕は中学生になつたら」と彼は言つた、「ママに時計を買つて  
貰うの。僕もこんな鎖にして貰おうや。……やあ、素敵なメダル  
だなあ！ パパのもちようど同じようなんだけど、小父さんのは  
ほらここんとこに条があるでしよう？ パパのは字がはいつてる  
の。……まん中んとこにはママの写真が入れたるんですよ。パパ  
の今の鎖は違うんですよ。環わのじやなくつて、リボンなの。……」

「どうして知つてるの？　君パパに会つたの？」

「僕？　ううん、……違うの。僕……」

アリヨーシャは紅あかくなつた。嘘うそを見つけられたのですつかり困つてしまつて、メダルを爪で一生懸命に引つ搔きはじめた。ベリヤーエフはじつと少年の顔を見詰めていたが、やがて訊たずねた。

「パパに会うんだろう？」

「ううん、……違うの。……」

「いけない、本当のことをお言い、嘘をついちやいけないよ。⋮⋮君の顔にちゃんと嘘ですつて書いてあるのさ。一ぺん言い出したんだから、もうごまかしても駄目なんだよ。さ、言つて御覽、会うんだろう？　さ、小父さんと仲好なかよしになろう。」

アリヨーシャはもじもじしていた。

「でも小父さん、ママに言わない？」と少年が訊いた。

「そんなことないさ。」

「ほんとに？」

「ああ、ほんとさ。」

「小父さん、誓うの？」

「やれやれ、困つた坊ちやんだね。この小父さんを何だと思つて  
るの？」

アリヨーシャはあたりを見廻した。みまわそれから眼をとても大きくして、彼の耳にささやいた。

「ただお願ひですからママに言わないでね。……誰にも言わない

でね、秘密なんだから。もしこれがママに知れたら、僕もソーニヤもペラゲーヤも酷ひどい目に逢わされるんだから。……じゃ、僕言いますよ。僕とソーニヤは毎週火曜と金曜にパパに会うんです。夕飯の前にペラゲーヤが僕たちを散歩に連れて出ると、僕たちはアプフェル喫茶店へ行くんです。するともうパパがそこで待つてるので。……パパはいつも仕切りのついた部屋に坐つてゐるの。あすこには大理石の素敵なテーブルや、背中のない鶯がちよう鳥の恰好かっこをした灰皿ごうがあるんですよ。……

「それから何をするの？」

「何もしないの。はじめに今日こんにちはを言つて、それからみんなでテーブルの廻りに坐ると、パパは僕たちにコーヒーやパイを御馳ごち

走<sup>そう</sup>してくれるの。ソーニヤは肉のはいったパイを食べるでしょう。けど僕は肉のはいったのは大嫌いなの。僕はキヤベツや卵のが好きなんです。僕たちうんと食べちまうものだから、後で夕御飯のときママに見つからないように、一生懸命たくさん食べるんです。

「それから何の話をするの？」

「パパと？ 色んなことを話すの。パパは僕たちをキツスして、抱きしめて、色んなとても滑稽な話をしてくれるの。それからこうも言うの、お前たちが大きくなつたら引き取つてやるぞ、つて。ソーニヤは厭<sup>いや</sup>だつて言うけど、僕は賛成なの。そりやママがいないと淋<sup>さび</sup>しいけど、僕その代り手紙を書きますよ。それよりか、お

休みの日にママの家へお客様に行つてもいいじゃない?——ね、  
そうでしょう? パパは僕に馬を買つてやるつて言うの。パパつ  
てとてもいい人ですよ。なぜママが別々に住んで、逢つてはいけ  
ないつて言うのか僕わか解らないなあ。パパはとてもママが好きなん  
ですよ。会うたんびに、ママは丈夫かい、何をしてるね、つて訊  
くんですもの。ママが病気だつて言うと、パパはこうこんなにし  
て両手で頭を抱えて……それから、そこらじゅう歩き廻るんです。  
いつでも僕たちに、ママの言うことをきくんだぞ、大事にするん  
だぞつて頼むの。ねえ、小父さん、僕たち不幸せなんでしょう?」  
「ふむ……なぜそう思うの?」

「パパがそう言うの。お前たちは不幸せな子供だなあ、つて言う

の。それを聞くと僕ぞつとするんです。お前たちも不幸せだ、俺も不幸せだ、ママも不幸せだ、つて言うの。それから、さあ神様にお前たちのこともママのこともよくお願ひおし、つて。」

アリヨーシャは鳥の剥製はくせいをじつと見詰めて、そのまま考えこんでしまつた。

「そうか……」とベリヤーエフはつぶやいた、「そうか、そんな風にやつていたんだね。喫茶店で会議をやつていたのか。で、ママは知らないの？」

「そりや、知りやしません。……どうして分かるもんですか。ペラゲーヤはどうしたつて言いつこはないし。一昨日おとといパパは梨なしを御馳走してくれましたよ。とても甘くつて、ジャムみたいの！ 僕

二つも食べちゃつた。』

「ふむ、……で、何かね、……ねえ、パパはこの小父さんのことは何にも言わないので？」

「小父さんのこと？ さあ何て言つたらいいのかなあ。」

アリヨーシャは探るような眼つきでベリヤーエフの顔をちらと見て、ちょっと肩を揺すつた。

「何にも変わつたことなんか言やしませんよ。」

「じゃ例え、どう言うの？」

「悪口は言わないの。だけど、つまり……小父さんのことをおこ

てるの。ママが不幸になつたのは小父さんのお蔭だつて言うの。それから、小父さんが……ママを駄目にして、つて。ねえ、パパ

つて変な人じやない？ 小父さんはいい人で、一度だつてママを叱しかつたことなんかない、つて僕言つてやるんだけど、パパは頭ばかり振つているんですもの。」

「すると、この小父さんがママを駄目にしたつて言うんだね？」

「そうなの。憤たたからないでね、ニコライ・イーリイツチ。」

ベリヤーエフは起たちあがつた。暫しばらくじつと立つていたが、やがて部屋の中を歩き廻りはじめた。

「こりや全く奇妙な話だ……おかしな話だ」と彼は肩を揺すり皮肉な笑いを浮かべながら呟つぶやくように言つた、

「自分がぴんからきりまで悪いくせに、この俺が駄目にしただつて？ 大した無垢むくの子羊があつたもんだ！ じゃ、つまり、この

俺がお母さんを駄目にした、つてそうお前に言うんだね？」  
「そうなの、けど……ねえ、小父さん憤らないつて言つたじやあ  
りませんか？」

「俺は憤りはしないさ。……それに、とに角お前の知つたことじ  
やない。いやはや、……まるでこれは大笑いだ。この俺はまるで、  
鶏が味噌汁の中に飛びこんだようなざま態だ。おまけに罪は俺にある  
んだそうだ。」

ベルの鳴るのが聞こえた。少年は席を飛び立つたかと思うと、  
駆け出して出て行つてしまつた。一分間ののち、一人の婦人が小  
さな女の児こを連れて客間にはいつて來た。これがアリヨーシャの  
母親のオリガ・イワーノヴァであつた。アリヨーシャも彼等の後

から、両手を振つて大声に歌をうたいながら、ぴょんぴょん跳ねてついて来た。ベリヤーエフはちよつとうなずいたまま、また部屋を行つたり来たりしつづけた。

「そりや勿論もちろん、文句の持つて行きどころはこの俺より外ほかにはないからな」と彼は鼻をくんくん言わせながら呟いた、「あの男の言うのは本当さ。あの男はなるほど侮辱を受けた亭主にはちがいないさ。」

「それ、何のお話なの?」とオリガ・イワーノヴナは訊ねた。

「何の話だつて? まあ、おきき。おまえの御亭主がとんでもない話をふれ歩いてるんだよ。この俺は大変な恥知らずの悪漢にされちまつたのさ。この俺がおまえや子供たちを駄目にしたんだと

さ。おまえたちはみんな不幸せで、俺だけが恐ろしく幸福なんだ。  
恐ろしく、まるで幸福なんだ！」

「私には何のことやら分かりませんわ、ニコライ。いつたい何ですの？」

「じゃ、あの小つぽけな紳士に訊いて御覽」とベリヤーエフはアリヨーシャを指さして言つた。

アリヨーシャは真紅まっかな顔になつた。それから急に蒼ざあおめて行つた。顔じゆうが恐怖のために歪ゆがんでいた。

「ニコライ・イーリイツチ」と彼は鋭くささやいた、「シツ。」  
オリガ・イワーノヴナは呆れあきがお顔でアリヨーシャを眺め、ベリヤーエフを眺め、それからまたアリヨーシャを見た。

「訊いて御覧つたら！」とベリヤーエフはつづけた、「おまえの所のペラゲーヤは大変な引きずり女だぞ。子供たちを喫茶店へ引つ張つて行つて、パパさんに面会させるんだ。だがそのことじゃない。問題は、パパさんが受難者で、この俺が悪者でならず者で、おまえたち二人の生活を滅茶滅茶めちゃめちゃにしちまつたんだ。……」

「ニコライ・イーリイイツチ！」とアリヨーシヤは呻うめいた、「約束したじやないの！」

「ええ、黙つてろ！」とベリヤーエフは手を打ち振つた、「これは約束なんぞより大事なことなんだ。俺は偽善は我慢できん、嘘は。」

「ちつとも分かりませんわ」とオリガ・イワーノヴナは言つた。

その眼に涙がきらきらした、「ねえ、リヨーニカ」と彼女は眸を息子の方へ向けて、「お前はお父さんにお会いなの?」

アリヨーシャには母親の声は聞こえなかつた。彼は恐ろしそうな顔でベリヤーエフを見詰めていた。

「そんなことがあるものですか!」と母親は言つた、「ペラゲーヤに訊いてみましょう。」

オリガ・イワーノヴナは部屋を出て行つた。

「ねえ、小父さんは約束したじやないの!」とアリヨーシャは身体じゅうを顫わしながら言つた。

ベリヤーエフは少年に手を振つて、やはり歩き廻つていた。彼は自分の受けた恥辱のことばかりに心を奪われていたので、また

元通りに少年の存在を忘れていた。この大きな真面目な男は子供のことなんぞ構つてはいられなかつたのであつた。

アリヨーシャは部屋の隅の方に坐つて、いかにも恐ろしくて堪らない様子で、自分が瞞された次第をソーニヤに物語つていた。彼はぶるぶると身颤いがとまらないで、吃つたり泣いたりした。こんな粗々あらあらしい仕方で嘘と顔を突き合わせたのは生まれてはじめてであつた。甘い梨や、パイや、高い時計やのほかにも、この世の中にはまだ別の色々な事のあることを、彼はこれまで知らずにいたのであつた。したがつてそれに附ける名が子供の言葉にはないのであつた。

(Житейская мелочь, 1886)



# 青空文庫情報

底本：「カシタンカ・ねむい 他七篇」岩波文庫、岩波書店

2008（平成20）年5月16日第1刷発行

2008（平成20）年6月25日第2刷発行

底本の親本：「チューイーホフ全集 第五卷」中央公論社

1960（昭和35）年発行

入力：米田

校正：noriko saito

2010年7月5日作成

2012年2月21日修正

## 青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたつたのは、ボランティアの皆さんです。

# 小波瀾

## ЖИТЕЙСКАЯ МЕЛОЧЬ

2020年 7月13日 初版

### 奥 付

発行 青空文庫

著者 アントン・チエーホフ Anton Chekhov

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>